

漁海況予報事業 一抄録一

田村 眞通・青山 宝蔵・田中 裕憲
鈴木 史紀・中川 賢三・涌坪 敏明
白取 尚実

発表誌名

平成2年度 漁況海況予報事業結果報告書

抄 録

I 海 況

1. 日 本 海

平成2年度の対馬暖流の勢力は、定線観測結果によると平成2年3月頃まではそれまでの暖冬の影響を受けて平年よりかなり強めであったが、5月以降平年並に回復した。9月に一旦強勢になったものの、10月以降は平年よりやや弱めになった。しかし10月以降の津軽暖流の状況や沿岸域の定置水温等より判断すると、実際は平年並かやや強めであったと考えられ、このような通年の暖流の強勢傾向がブリなどに見られる暖水系魚の好漁の一因となったとも推測される。(ブリ漁獲量は5～11月までの累計で過去3ケ年平均の3.4倍)。

2. 太 平 洋

津軽暖流は対馬暖流以上に一年を通して平年よりかなり強く、沖合への張り出し位置が東偏し、また南下流量も比較的多めであった。それに反比例するかのように親潮系冷水の南下の先端も北偏し、また親潮系水そのものも全般に離岸傾向でその中心水温も高めであった。そのため昨年以上に表層水温が高く、今年も昨年同様秋サケ延縄漁が振るわない結果となった。

II 漁 況

今年の漁況にみられた特徴は太平洋側の近海スルメイカの好漁と日本海側での暖水系魚類の漁獲量の増加傾向であろう。

太平洋側(八戸前沖)のスルメイカについては過去10年間では最高の漁獲量であり、特に7月一ヶ月で全漁獲量の1/3にあたる1,176トンが漁獲された。また海峡東部の大畑でも7月まで過去5年を上回るペースで漁獲されたことから考えると、日本海から太平洋へかなりスルメイカが回遊したと思われる。

また暖水系魚類の漁獲量の増加であるが、前述したブリ以外にもマダイが過去3ケ年平均の1.6倍、また漁獲統計は無いが現場の情報としてアジ類の漁獲量の増加がみられた。またこれと相反するように日本海側では近年冷水系魚類のアブラツノザメやマダラの漁獲量の減少傾向もみられている。